

# 世界大学ランキングは何を評価し 大学に何をもちたらずか

(株)進研アド 改革支援室長

百々 岳夫

とど・たけお

2015年のTHE世界大学ランキングには日本の41大学がランクインした。従来は400位までの発表が、今回は801位まで拡大され、多くの大学にとって、ランクインがより現実的なものになったのではないか。THE評価の基準、ランクインすることによるメリットについて解説し、日本の大学が世界ランキングにどのように向き合うべきなのかを考える。

## 多くの大学が自分事として 考えられるランキングに

「THE (Times Higher Education) 世界大学ランキング」(以下、THE)は、88か国の1万8000大学\*1を対象に、イギリスのTES Global社が運営する大学ランキングだ。ウェブサイトは200以上の国・地域で閲覧され、月間1000万PVを数える。例年10月に総合的なランキングが発表され、その後、翌年の夏にかけて地域別、分野別にまとめ直したものが順次リリースされる。

2015年の結果発表時は、日本の大学が順位を下げ、アジア首位の座も明け渡したという話題に報道が集中した。一方で、前年は400位までだった発表が801位まで広がり、401~801位に日本から、これまで圏外だった大学を多数含む35大学がランクインしたことも注目に値する。地方・中小規模の大学にとって、ランクインをよりリアリティをもって考えられるようになったと言える。

## 13の評価指標ごとに “重み付け”が異なる

THEの順位付けは5つの分野の合計スコアによってなされ、ランクインした大学についてはウェブ\*2で分野別のスコアを見ることができる。

5分野は13の指標に細分化される(図表)。均等に合算されるわけではなく、各指標に重み付けされているのが特徴と言える。比重が高いのは「評判調査」(①と④の合計33%)や「論文の引用数」(30%)だ。

評判調査は、THEが独自に実施する。専門領域ごとに大学教員を選び、アンケートに答えてもらう形で評価を行っている。

「自学の順位が低いのは、外国人の教職員や学生が少ないからだ」という声をよく聞くが、これに該当する②のウエイトはそれほど高くない。THEが高く評価するのは、注目度の高い論文を多く生み出す大学、教育力や研究力

を世界に対してアピールしている大学だと言える。

「教員1人あたりの学生数」や「外国人学生比率」などの定量的なデータは、対象大学に直接アンケートを送付して情報を収集する。日本の大学は、「対応する部署がない」「ランキング圏内に入らないと思い込んでいた」「学内で情報開示の基準ができていない」といった理由で回答しないケースもあり、他国に比べて回答率が低い(25%)。THE担当者は、「回答していればおそらくランクインできたろう大学が複数あった」と指摘する。自学のことを国内外にアピールする機会に対応できなかったことになり、非常にもったいない。

これらTHEの評価指標は、他社の世界大学ランキングと比べるとより広域・多面的で、研究者だけでなく大学内外のさまざまな人による利用を想定している。他の著名なランキングには、上海交通大学(中国)の世界一流大学研究センターが毎年8月に発表する「世界大学学術ランキング」、イギリスの大学評価機関であるQuacquarelli Symonds社が毎年9月に発表する「QS世界大学ランキング」があるが、どちらも論文数、引用数が主要な評価指標になっており、研究者向けと

\*1 学部生対象の授業があり、かつ2010~2014年の研究論文数が1000件以上の大学が対象(工学と芸術系はこの要件を満たさなくても対象になる)。

\*2 <https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings>

図表 THEランキングの分野・指標と評価比重

| 分野                          | 指標                    | 割合 (%) |     |
|-----------------------------|-----------------------|--------|-----|
| ① Teaching 教育力              | 評判調査 (アンケート)          | 15     | 30  |
|                             | 教員数: 全学生数 (率)         | 4.5    |     |
|                             | 博士号取得者数: 学部卒業生数 (率)   | 2.25   |     |
|                             | 博士号取得者数: 教員数 (率)      | 6      |     |
|                             | 大学全体の予算: 教員数 (率)      | 2.25   |     |
| ② Research 研究力              | 評判調査 (アンケート)          | 18     | 30  |
|                             | 研究費収入: 研究者数 (率)       | 6      |     |
|                             | 論文数: 研究者数 (率)         | 6      |     |
| ③ Citations 研究の影響力          | 論文の引用数                | 30     | 30  |
| ④ International Outlook 国際性 | 海外留学生数: 国内学部生数 (率)    | 2.5    | 7.5 |
|                             | 外国籍教職員数: 国内教職員数 (率)   | 2.5    |     |
|                             | 国際共著論文数               | 2.5    |     |
| ⑤ Industry Income 産業界からの収入  | 産業界からの研究費収入: 研究者数 (率) | 2.5    | 2.5 |

\* 「教員」「職員」「研究者」は国により定義が異なり、THEが個別に判断する。

言える。論文の調査には、「世界大学学術～」は独自の手法を、「QS～」とTHEはどちらもオランダの学術出版社Elsevier社の書誌・引用文献データベース「Scopus」を使用している。

### 世界全体から見た 自学の現在地を知る

2015年のTHEには、対象地域の拡大という大きな変更があった。対象となる大学の所在地を、アジア、アフリカ、中南米にまで大幅に拡大。研究に使用する言語として英語以外に、日本語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、中国語を含め、母国語の論文も調査対象にした。評判調査の回答者も、人口密度、大学の数などを考慮して対象となる国・地域を広げた結果、アジア圏の

教員が増加したという。

この変更によりランキングは、イギリス、アメリカに有利なものから、世界全体の競争結果を表すものになっていくと考えてよいだろう。実際、EU諸国、アジア諸国から多数の大学がランクインし、相対的に日本の順位は下がることになった。

ただし801位までに41大学という数は、アメリカ(147大学)、イギリス(78大学)に次いで世界3位だ。EU諸国や新興国では政府単位でランクアップ戦略を練ったり、各大学が、大学間協定や産学連携で常にランキングを意識したりと、積極的に関わるケースが多い。一方、日本では、日本語で論文を書く傾向が強い学問領域があったり、ランキングについての理解が十分ではなかったりすることから、ネガティブな

反応をする教育関係者も多い。日本が現状でこの位置であれば、積極的な対応を図れば大幅に順位が上がる可能性が高い。現状では、90位以下の大学間のスコアは非常に拮抗しており、1、2ポイントの上積みで順位が10程度上がる。指標の比重を考慮して対策を練れば、数十位単位のランクアップはそれほど難しくないだろう。

アンケートに確実に回答して評価資格を得たうえで、教育・研究のネットワークを世界規模で拡大し、研究分野の強みを証明することが大切だ。特色を持つ研究分野を中心に、海外との共同研究や研究者間交流の推進、世界規模の学会の開催、外国人留学生に対する母国で役立つ知識・技術の教育、海外向けの情報発信(特に英語版ウェブサイト)の充実)などを行うことが効果的だ。

世界規模の調査になったことにより、THEに対する期待と活用はこれまで以上に高まりつつある。TES Global社は複数の国の政府に利用を直接働きかけており、ASEAN諸国では、ランクインした大学への留学は、国費奨学生扱いになっている。THEが、教育・研究レベルや国際性の質保証になっているのだ。また、大学間協定先の検討、企業による研究資金提供先の検討などにも活用が進んでいる。

当然ながら、THEは自学の位置を示す一指標で、順位自体は大学がめざすゴールではない。しかし、国内の18歳人口が減少傾向を迎える現在、外国人留学生を確保したい、海外ネットワークを構築したいと考える大学にとっては、有用な指標になるはずだ。(談)

### ランクインした大学に聞く

## ランキングの捉え方と今後のグローバル戦略



埼玉大学学長  
**山口 宏樹**

やまぐち・ひろき

1975年埼玉大学卒業。1980年東京大学大学院修了(工学博士)。1982年埼玉大学講師。工学部長、理工学研究科長、理事・副学長を歴任、2014年から現職。

### 補助金活用施策によるスコアの向上を期待

埼玉大学の2015年の評価結果(図表)を見ると、「Industry Income」のスコアが高い。2013年度に選定された国立大学改革強化推進補助金が、外部資金の獲得としてカウントされたものだろう。「Citations」は理学系の研究論文が、「International Outlook」は東南アジアとのネットワークがそれぞれ評価されたと考えている。大学院の土木系研究分野では20年以上、東南アジアから留学生を受け入れており、400人を超える修士・博士取得者が祖国で活躍している。

「Teaching」は、日本の大学全体の弱みかと思う。日本語ベースの教育が高度化したために、留学生の受け入れが進んでおらず、評価が上がりにくい。「Research」は理系学部が多い大学が有利な分野であり、本学は文理が半々の学部構成なので、スコアの飛躍的な向上は難しいだろう。

来年度以降、国立大学改革強化推進補助金による収入が少なくなるぶん、「Industry Income」のスコアは下がるだろう。ただ、この補助金を使った施策により、他の評価項目のスコアが上がることを期待している。

使途の一つが、理工系の研究分野

の選択と集中だ。「ライフ・ナノバイオ」「グリーン・環境」「感性認知支援」の3領域に学内資源を集中させ、研究力強化を図っている。一方、人文社会科学研究科に、留学生をターゲットにした国際日本アジア専攻を設置した。理工系、人社系両方の改革に伴い、外国人教員を11人採用している。

この補助金による施策以外でも、グローバル人材の育成には力を入れている。海外協定校は2012年度の64校から126校(2015年12月現在)まで増やした。また今後は、全学部、研究科にグローバル人材育成プログラムがあることを強くアピールしていく。

こうした種々の施策が、評判調査や、「International Outlook」の外国人学生・教員数が関係するスコアを押し上げてくれるはずだ。

### 文・理と基礎・応用の両輪を保ち存在感を示す

THEに限らず、大学ランキングの評価方法にはそれぞれ「癖」があり、これだけが大学の真の価値を決めるものとは思っていない。単純に順位を上げようとするなら、理工系、中でも外部資金を獲得しやすい応用研究を重視し、「質より量」で論文を増やす戦略が効果的だろうが、それは本学がめざす姿とは異なる。

| 埼玉大学のTHE評価結果 (2015年)      |          |
|---------------------------|----------|
| Rankings 順位               | 601-801位 |
| 分野                        | スコア      |
| Teaching 教育力              | 18.6     |
| Research 研究力              | 9.6      |
| Citations 研究の影響力          | 23.4     |
| International Outlook 国際性 | 20.6     |
| Industry Income 産業界からの収入  | 29.6     |

今回の順位には全く満足していないし、今後も順位は無視できない。海外ではランキングの価値が非常に高く、留学先や協定先の選択に影響を及ぼすことも承知している。

今後は、現在の取り組みを継続し、国内外のステークホルダーに本学の存在感を示すことによって、結果的に順位が上がる形をめざす。現代的な課題の大部分は文理融合による解決を求められているので、人社系の人材育成を疎かにはできない。応用研究で積極的に外部資金の獲得を狙う一方で、基礎研究には国から配分された資金を投じ、質を確保する予定だ。文・理、基礎・応用のバランス感覚が、これまで以上に求められることになるだろう。